

バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第129号 [2015年11月]

さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8章22節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+
主の聖名を賛美します。バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第129号をお送りします。今月はふたたび、日本の鈴木伸治牧師よりネットによる礼拝を導いていただきました。ちょうど現在一時帰国中の鈴木羊子姉とご主人のイグナシオさんもお母様と一緒にご参加くださり、日本から奏楽もしていただいて素晴らしい礼拝となりました。

メッセージ：何事も神様のお導き（聖書：マタイによる福音書6章25-34節）

鈴木 伸治 師

「エイメン」を繰り返す歌で知られる映画、「野のユリ」を私は時々鑑賞しています。この映画を見るたびに、何事も神様がお導きになり、形あるものへと変えてくださり、存在の勇気を与えられるのです。

この映画は、主人公の黒人青年ホームーがアリゾナ砂漠を放浪していて車の冷却水が無くなり、砂漠の町にある一軒の家に立ち寄って冷却水を所望するところから始まります。実はこの家の住人は東ドイツから亡命してきた5人の修道女たちで、突然の来訪者ホームーこそ神から遣わされた人物と感じ、この場所に教会を建てるように言います。ホームーはこれで臨時収入が得られると考えて引き受けますが、マリア院長は賃金を支払おうとせず、彼ひとりで建築を続けさせます。そのうち、この町に教会なんて建つ訳ないと高をくくっていた町の人々が変えられて建築を手伝うようになり、ついに完成。賃金は一切支払われませんでした。ホームーもその頃には自分が神様から遣わされたのだと感じて何も求めませんでした。最初のミサが行われる前夜、ホームーは修道女の皆さんと「エイメン」を歌いますが、歌いながら外に出て行きます。そして車で立ち去って行くというストーリーです。

この映画の中でホームーはマリア院長に賃金を求め、二人は聖書を開きながら話し合いますが、そこで今日読んだ聖書の箇所、「なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった」がマリア院長により読まれます。この言葉は、イエス様の時代にローマ帝国の支配下でみじめな生活を強いられていた民衆に、日々の生活を満たすことを求めて生きるのではなく、「神の国と神の義」を求めて生きることを教えています。この言葉はホームーをも変えて行きました。



「神の国」は、毎日の生活がイエス様の御心に従って歩むことであり、主の御心である「神の義」により生きることです。「神の国」に生きる人生とは、「自分を愛するように隣人を愛する」生活であり、その人生を歩むとき、私達が必要と思われる衣食住は神様が備えてくれるのです。私達の究極の目的は、この世において衣食住に満たされて喜ぶことではなく、永遠の命をいただくことなのです。

しかしながら私達は人間ですから、この世の命を永遠に生き続けるものではありません。その人生の途上、いろいろなことに出会い、経験しながら歩むのですが、基本は神様のお恵み、お導きがいつもあるということ、それを教えているのがイエス様の「思い悩むな」ということです。映画「野のユリ」は、神様のお恵みがあり、お導きがあるので、人々が不可能であると思っていたことが実現されて行くという現象を描いています。当初は打算的に歩んでいたホームーが、自分が神様から遣わされていると思うことにより、現実が祝福され、自分が変えられていきました。同様に、神様はこの私を現実には遣わしておられるのです。神様は私の生き様が人々の喜びとなり、希望となるよう知恵と力を与えてくださっているのです。神様は私の生き様がどのような状況でありましようとも、この現実の状況にお導きとお恵みをくださっているのですから、私の存在を喜びつつ歩むことです。